

乍ら足を急がせた。崖の腹に僅かな道をつけてあつたのには臆病な自分は、何んと無しに薄氣味悪かつた。漂々たる春木川に架けた羽衣橋を渡る折は、もしやと思ひ乍らビク／＼して渡つた。いよ／＼山道にかゝると、登つては休み休んでは登り漸くのこと、四十二丁目へ着いて休んで居つた折、御山も近くなつたと見へて、微かに太鼓の音が聞ゆる。其の外時々聞ゆるは鳥の聲のみ……、道で行違つた人も七八人だけだ。法鼓の音に勇み立てられ總門を潜り、大鐘を三度ついて法味を捧げ早速隨身門へと急いだ。前の山は霧が深くて判然とはしないが、山形だけは臙け乍らみゆる。然し地理に暗い自分にはどれが何れやら解らないのが残念だつた。

隨身門を下れば七面山の本殿は嚴として構へ、不斷の法鼓は鑿々として響き渡り、おのづと靈威にふれて一種異様な感がした。敬慎院に參籠を願ひ御寶前に法味を捧げて後、夕食を戴いた折は、山海の珍味も是れ以上のものはあるまいと思つた。御山の靈威とでもいふべきか。

天理を訪れて

矢野 鍊 明

今回大阪の岡島伊八氏の篤志によつて舉行された關西見學旅行團廿三名のその一員と

して氏に深謝し、以てこゝにその旅行中尤も感じた事を記してみたい。

我々の目を驚かすあの廣大な天理の信徒宿泊所こそ、天理教の隆盛を語るものであるが、然し我々は唯建物の大小によつて、その宗教の生きてゐるか死んでゐるかを比較して見たくない、少なくともこゝに集ふ信徒の態度によつてこれを觀察したい。

私が天理へ行つて最も感動を受けたことは宗教が生きてをり、そしてこゝに集ふ數千人の信徒の態度が敬虔であると云ふことである。教祖去りてまだ日の浅いせいとも知れぬが、私は嘗て天理を訪れたやうな氣分を味はつたことがない。粗末な淺黄の印袴天を着た彼等は、一日何の苦も訴へず働らく否彼等は衷心からの感謝の情を以て、泪を以て、奉仕の生活を續けてゐるのだ。彼等の生活には無理がない、一舉手一投足これ教祖への報恩を意味する、彼等は仕事をするのではない、仕事をさせていたゞいてゐるのだ。誰でも一度天理を訪れたならば、こゝに信仰の溢れた敬虔な人、感謝の生活を續けてゐる人を見るであらう。あゝ、我々はこゝに何を學ぶ？、こゝに訪れる者は、第一に教義を云々してはならない。數千の男女は信仰は生きてゐるのだ、感謝の生活をしてゐるのだ。彼等には教義の優劣を批判する餘裕を持たない。彼等は信仰に生きてゐる。故に信徒宿泊所の廣大なる建物も、常に白足袋で歩いて汚れず、又實によく萬事が整理されており、その事務のよく整頓されてゐること、又三千人も集る甘露殿に傘や下駄を置いて、一回も紛失したことなく勿論間違へのあらう道理はな

い。時にこゝに訪れる西田天香氏も托鉢に来て、その仕事を見つれることなく、空しくかへると云ふことだ、この事實を以てその内容の一般を推察することが出来るであらうと思ふ。

彼等の感謝の生活、奉仕の労働の結晶は、あの廣大なる建物として生きた手本を我々に示してくれる。その建物も全國より集る信徒の奉仕により一切が出来上るのだ、他より何者も雇はない、大工も左官も土方の仕事も、皆彼等の手によつてなされる、そして一度その工事に着手すれば、餘程の建物でも旬日にして出来上る、之信仰の力によるものである。我々の目を開いて日本全國の、宗教團體の事業を見よ、かくも生々とした信徒の直接の労働により、あの廣大な建物を成し得るであらうか、勿論他の宗教團體の人々は、多額の資金を出して、その事業の遂行に努力してくれる。結局その結果は同一であらうが、そこに眞の奉仕的な態度と、敬虔さと云ふものが少ないやうだ。そして一般にそうとは云はれぬか、自己の功績を云々したがったり、又その爲にのみ努力してゐるやうに、一寸見わたるのは誠に遺憾である。

又辭を低くして「見送らしていただきます」と云ふ言を聞け、我々は不輕菩薩に接してゐるやうな氣がして、反對にこちらから感謝の情を以て合掌したいやうな氣になる、宗教は學ではない。我々の心に潜む佛性はかくして培はれてゆくのだ、無言の説教、無言の教化、云ひ得べくんば彼等こそ、それではなからうか。我々とその教祖を異にし、教理を異にしてゐるが、その敬虔の態度に接するとき

慥に人間が淨化される、宗教を信する者はこの態度が、尤も大切であると思ふ。この敬虔の態度によつて人間を淨化する、これだけでも彼等はかなりの大なる役目を果してゐるわけだ。人を禮讚し得るだけの信仰を持てる彼等よ、あゝ、彼等こそ多幸なれ。

一日の奉仕の勞働を終へて夕の禮拜に向ふ人々、月は秋の野の彼方より靜かにのぼる、平和な而も靜寂の夕である。天理に立ちてすがくした氣分の、そして希望にもゆる彼等の姿を凝視せよ、これ實に我々の夢の如くに聞いてゐる、エルサレムの聖地のそれである。我々がこゝに秋の夕の月を見るこれ聖地エルサレムに上る靜寂な泪ぐましい月だ、我々は既に天理の人々の尊い姿を見て上りゆく月を仰ぎ泪ぐむ、彼等是一日の奉仕を終へて同じ月を望める、その氣分に於てどの位の差があらうか、エルサレムのそれを見る私、唯泪ぐましい情に胸は一パイになる、自分は唯口ずさむ

現實のエルサレムあゝ奉仕終へ

月見て集ふ天理の聖地

我々はこの聖なるシーンを見て、何を學びしか？ あゝ、唯信仰、信仰、信仰こそ最も幸福なる世界を創造することが出来るのだ、我々には日蓮聖人の信仰あり、その信仰に生きる、これ多幸と云はずしてどうしやう。私はこの天理を去るとき、どの位愛着を感じたか、そうだ、自分は慥にこの聖なるシーンを、自己の信仰にひき戻し、調和し、同化して見てゐるのだ。自分はこの聖なるものとして、

自分の眼にうつるその陰の醜は見たくない。あく迄も直感したその感を失ひたくない、永遠にそのシンを思ひ浮べてゆきたい、そしてそのすがくしい気分で自己を淨化してゆきたい、自分は二度と訪れて、この清い感情を毀したくはない。

甘露殿に入れば黒い姿の彼等は、各自敬虔な祈りを捧げてゐる、數千人のひれ臥す態度、それは形式的のものではない、感謝の溢れがその態度に現はれたのだ。多額の運動金を費し、多くの人々の口から、泡を飛ばしての説教よりも、この場面を見る方がどの位感化を受けるか知れない、鼠算の信徒のつくり方も、こうした人によつて行はれるかと思ふと、その偉大なる力のあることが首肯される。その簡單なる儀式は、忙しい社會には非常に適合してゐると思ふ、而もその儀式で充分に祈りをささげることが出来るのだ、この点に於ては日蓮宗としても、大いに學ぶところがあると思ふ。

私は以上述べてきたやうな、感を他の寺院に参りて味ひ得なかつたことを一面淋しく感じた。新興宗教の隆盛期に當る天理教が今後如何になりゆくか、又吾々としてこれを如何に見るべきかを考へつく表に出ずれば、月は天理の人々を祝福するものゝ如く、空に懸つてゐる、その月光の下に私は自己を凝視し、天理の月を再び見た。未知の人は「見送らしていただきます」と云つて見送つてくれた我々は天理の人々に何と感謝しよう、私は限りなき愛着を感じながら月を見、うなじを垂れて歸路についた。